

史 跡 斎 宮 跡

昭和62年度現状変更緊急発掘調査報告

昭和63年3月

明 和 町

序

国史跡斎宮跡にとって昭和62年度は、大変明るい話題がありました。それは、昨年5月30日、浩宮様が斎宮跡を御視察されましたことや、6月7日には、さらに広く整備された「史跡公園斎宮跡」をメイン会場として「斎王まつり」が盛大に催され、町内外から数千人の人々でぎわい、徐々にではありますが史跡斎宮跡の名が広まってきたことは、誠に喜ばしいかぎりであります。

また、指定当時から念願でありました博物館の本体工事が古里地内に1月着工され、それに伴う周辺整備の準備も整ってまいりました。これが、完成すれば、歴史博物館を核に県内の埋蔵文化財の拠点として、又史跡公園として、広く活用されるようになっております。

このように、斎宮跡の保護・保存・活用が進む一方、140haに及ぶ広大な史跡内に住宅密集地をもつ性格から、昭和62年度は、57件の現状変更等許可申請が提出されました。これらの中には、博物館等に伴うものもありますが、ほとんどが個人住宅の新築や増改築、電柱の建て替えや移設、道路や側溝の改良など、住民の生活環境に欠かせないものであります。

この報告書は、その中で事前調査が必要であった15件についての結果をまとめたものであります。これらは小規模なものがほとんどですが、斎宮跡の究明に貴重な資料を提供してくれるもので、これらの成果の積み重ねにより斎宮跡の姿がより明確になることを期待するものであります。

最後に、発掘調査にご協力いただいた地元の方々や、発掘調査及び報告書の作成にご協力いただいた三重県斎宮跡調査事務所並びに関係各位に対して深甚の謝意を表する次第であります。

昭和63年3月

明和町長　辻　英　輔

例　　言

1. 本書は明和町が昭和62年度国庫、及び県費の補助金の交付をうけて実施した史跡斎宮跡の現状変更緊急調査の結果をまとめたものである。
2. このうち第70－8・9・16次の発掘調査は、それぞれの原因者が費用を負担した調査である。
3. 調査は明和町（斎宮跡保存対策室主管）が調査主体となり、三重県斎宮跡調査事務所が担当した。
4. 発掘調査・整理および本書の作成には、三重県斎宮跡調査事務所の横山洋平、山沢義貴、田坂 仁、泉 雄二、上村安生があたり、刀根やよい、坂真弓美、上田真登、松田早苗、中桐真紀がこれに協力した。
5. 遺構実測図、遺構表示等は、全て三重県斎宮跡調査事務所刊行の調査概報に準じている。

目 次

1. 前 言.....	1
2. 第70-1次調査.....	2
3. 第70-2次調査.....	6
4. 第70-3次調査.....	7
5. 第70-4次調査.....	10
6. 第70-5次調査.....	12
7. 第70-6次調査.....	13
8. 第70-7次調査.....	14
9. 第70-8次調査.....	15
10. 第70-9次調査.....	17
11. 第70-10次調査.....	18
12. 第70-11次調査.....	20
13. 第70-12次調査.....	21
14. 第70-13次調査.....	22
15. 第70-14次調査.....	23
16. 第70-15次調査.....	24

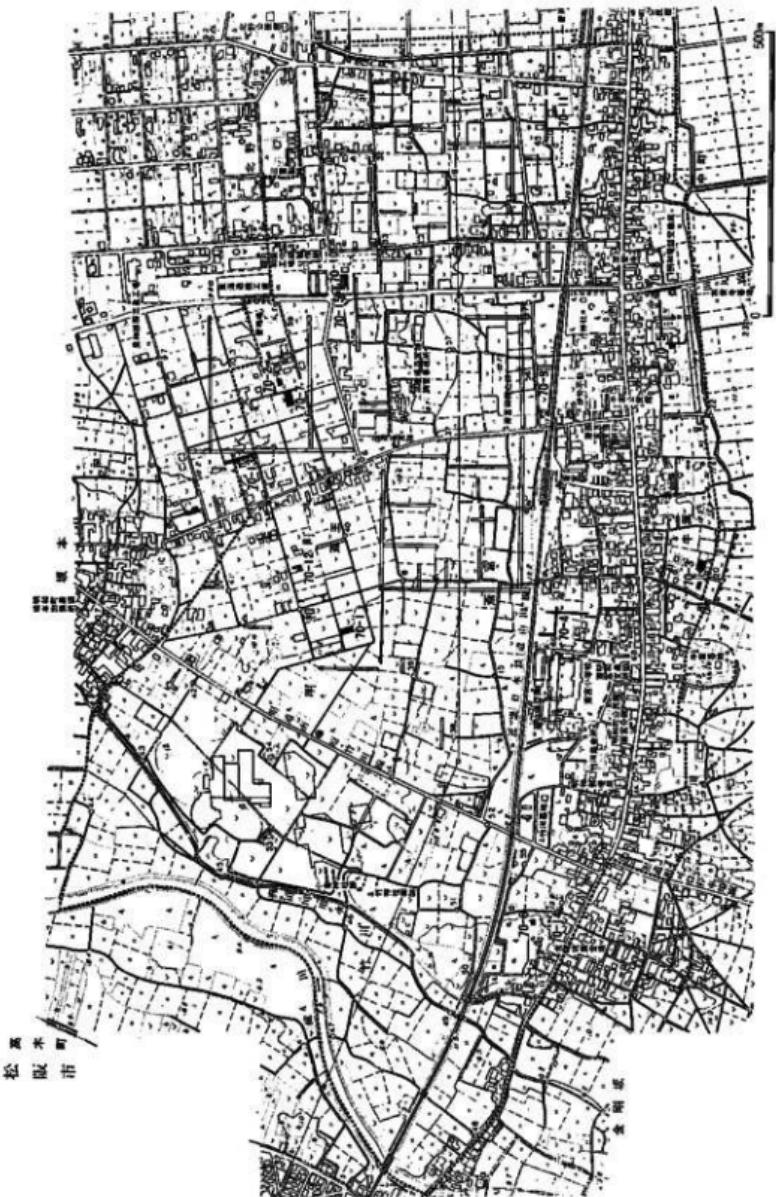


fig. 1 発掘調査箇所位置図 (1:10000)

1. 前 言

昭和54年に史跡指定を受けて以降今年度までの間、史跡内の現状変更に伴う許可申請の数は428件を数え、緊急発掘調査件数は116件、面積にして23,922m²に達している。

このうち今年度の現状変更に関する許可申請数は57件で、発掘調査を実施したのは、昨年度申請のあった第70-1次調査を含めて16件、2,854m²である。博物館進入道路建設予定地の調査（第70-16次調査・原因者負担）面積は987m²（総面積約7,700m²）を占めるが、該調査は現在もなお続行中であるため、別途報告する予定である。

以下に報告する15件、1,867m²分の調査のうち、県道田丸停車場・斎明線の第70-8次調査および近鉄保全柵新設地の第70-9次調査の2件については、第70-16次調査同様、原因者負担によるものである。

上記15件の調査の場所は、近鉄線北側で9件、同南側で6件、保存管理計画上の地区でいえば、第2種保存地区内での調査は2件（第70-10次・第70-15次調査）でその他は全て第3種及び第4種地区である。とりわけ史跡北部の博物館進入道路建設予定地に沿った周辺地域での調査が全体の3分の1（5件）を占めている。

竹川地区の第70-6次・第70-14次調査では飛鳥時代の遺物が出土し、從来の調査結果と併せ考えると、史跡西南西地域一円に該時代の遺構が分布する可能性を一層強くした。坂山地区の第70-1次調査では、奈良時代前期の円面鏡や墨書き土器、ヘラ書き土器の他、斎宮では初例の鉄製鍬先が出土したことが注目される。史跡最南端の第70-3次調査では奈良時代末期～平安時代前期の大型建物が2棟検出された。これは從来想定している方形区画の外に位置するもので、斎宮跡の解明に大きな課題を投げかけるものであったと言えよう。

年 度	現 状 変 更 申 請 数	発 掘 調 査 件 数	調 査 面 積	補 助 金 事 業 調 査 件 数	補 助 金 事 業 調 査 面 積
54	33	17	3,968	12	996
55	60	12	1,281	10	815
56	53	12	5,416	10	696
57	50	8	657	7	577
58	52	16	3,757	10	1,440
59	30	15	2,884	12	1,589
60	39	8	1,260	5	1,014
61	54	12	1,845	9	1,507
62	57	16	2,854	13	1,620

2. 第70-1次調査 (6 ACC-X)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字塙山3325-1

原 因 個人住宅の新築

調査主体 明和町

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和62年4月13日～4月24日

調査面積 176m²

1) はじめに

申請地は宮城西部の塙山地区でも北に位置する。昨年春に農道を挟んだ北西の畑で第65-1次調査が実施されており、奈良時代前期の円形周溝1、掘立柱建物3、奈良時代後期の竪穴住居1等が検出されている。奈良時代前期の掘立柱建物はすべて調査区南側で検出されていたため、当申請地でも北側部分において検出が予想されたところである。そのため北側部分に主眼をおき、東西8m、南北22mの調査区を設定して調査を行った。

2) 調査概要

遺構面までは耕土、包含層が各0.2mほどあり、遺構面までの深さは約0.4mである。検出した主な遺構には奈良時代前期の掘立柱建物S B5101、土塙SK5102がある。掘立柱建物S B5101は調査区南にあり、東西2間、南北3間以上、土塙SK5102は調査区中央で、南北4m、東西5m、深さ0.5mの

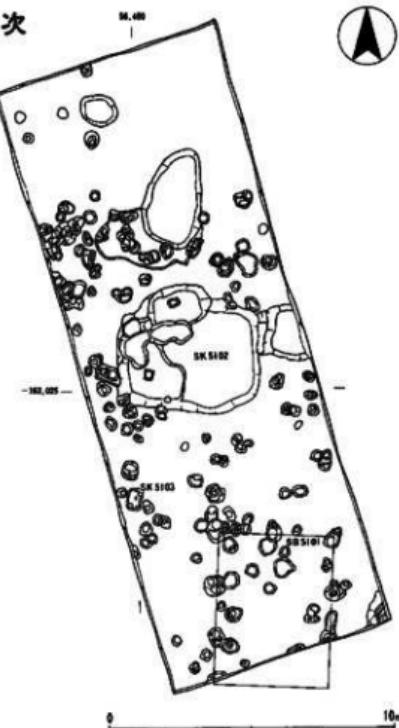


fig. 2 遺構実測図 (1:200)

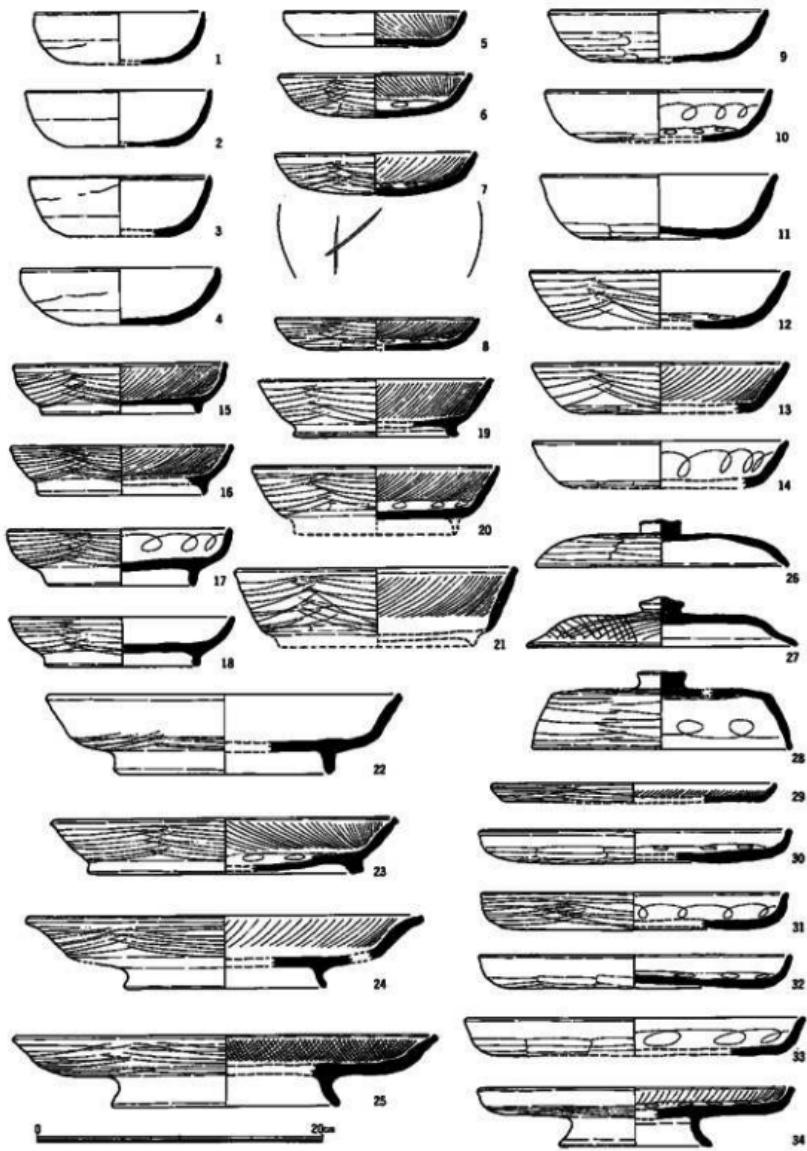


fig. 3 遺物実測図 (1:4) SK5102; 1~34

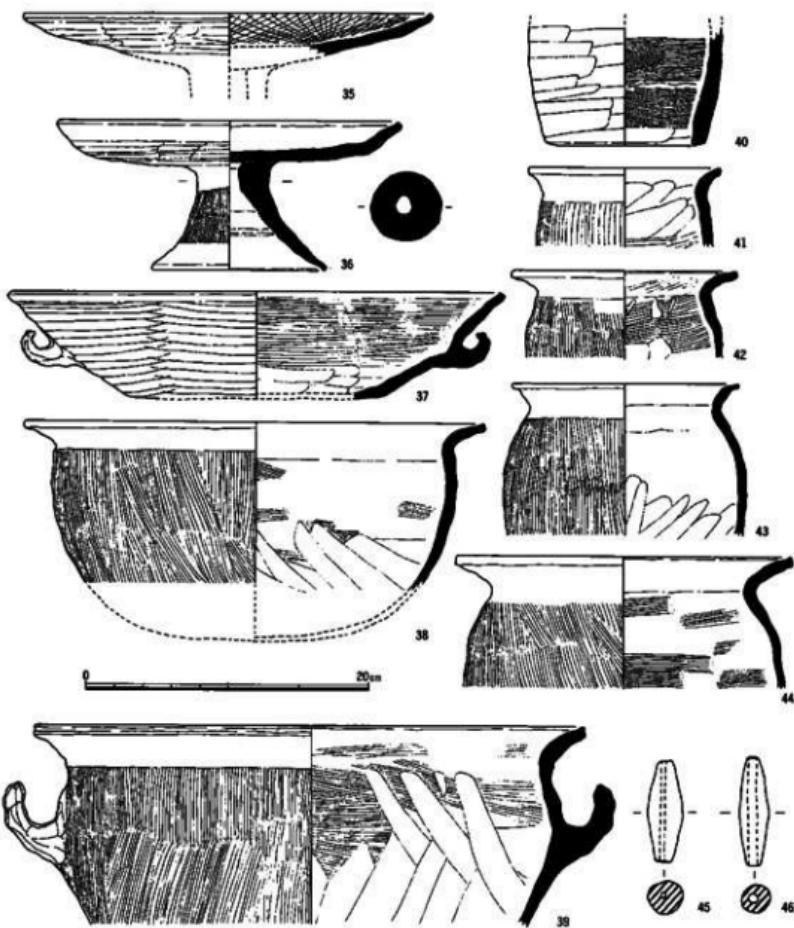


fig. 4 遺物実測図 (1:4) SK5102; 35-46

隅丸方形を呈する。他の遺構としては、方形土塙S K5103がある。埋土から焼土、骨、炭化物、銭、鉄釘等が出土していて、鎌倉時代以降の中世墓と考えられる。

出土した遺物は整理箱で約25箱ある。そのうち土塙S K5102から出土した遺物は土師器を中心とし、整理箱で10箱あり、土師器には田舎風椀(1~4)、杯(5~21)、盤(22~25)、蓋(26~28)、皿(29~34)、高杯(35~36)、鉢(37)、甕(38~39·41~44)、管状土製品(40)、土錠(45~46)があり、須恵器には杯蓋(47~53)、杯(54~57·59~61)、皿(58)、提瓶(62)、甕(63)、短頸

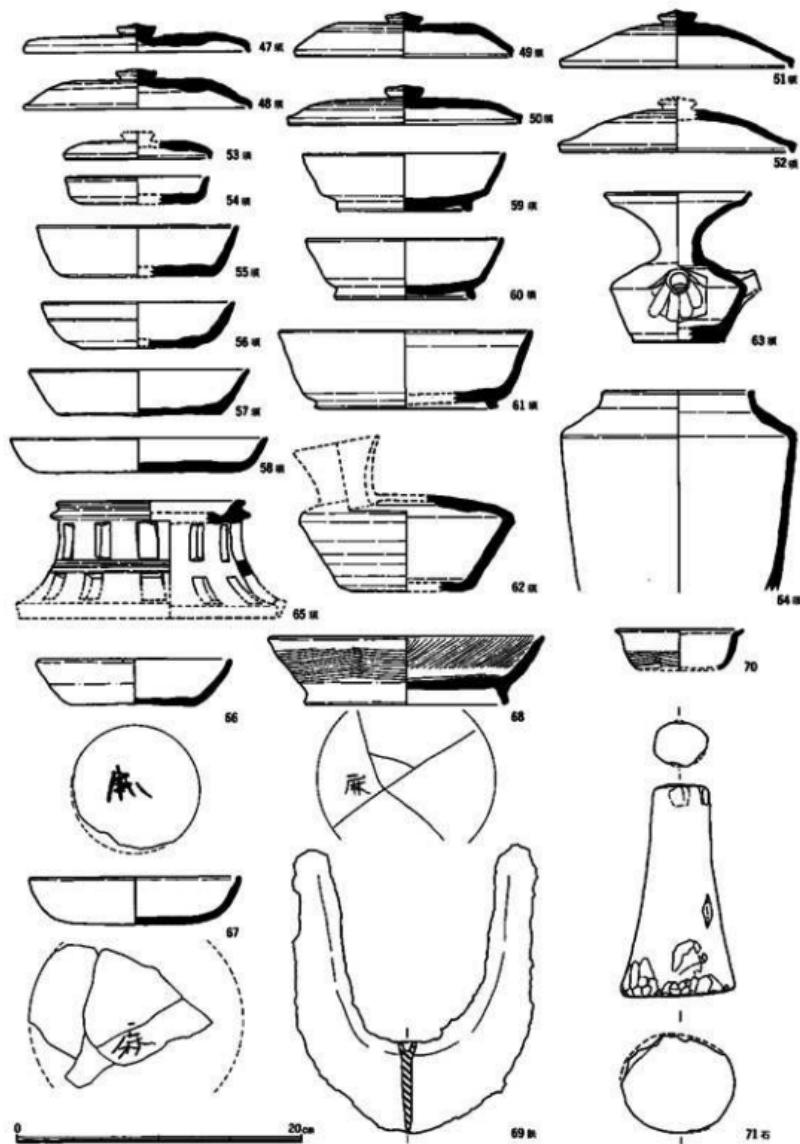


fig. 5 遺物実測図 (1:4) S K 5102; 47~69、包含層；70・71

壺（64）がある。また、脚に方形二段透かしを施した須恵器円面鏡（65）、「麻」と判読される墨書き土器（66）、ヘラ書き土器（67・68）、フイゴの羽口1点、土錐5点のほか底から10cmほど上で鉄製U字形鋸先（69）が出土している。斎宮跡土師器編年の中でも新しいSK3000に比定できる。また、包含層から径8.9cmのミニチュア土器（70）と用途不明の石製遺物（71）が出土している。高さ14.5cm、上円径3.2~3.7cm、下円径7~8cmの円錐形を呈する。上下の面は摩耗しており、朱の痕跡がわずかに残る。

今回検出した主な遺構は奈良時代前期の掘立柱建物SB5101、土塙SK5102と少なく、斎宮の中でも比較的遺構の密度の薄い地域であることが明らかとなった。掘立柱建物は当初予想していた北側部分ではなく、南側部分で検出されている。この掘立柱建物の方位は第65-1次調査で検出された建物群の方位とほぼ同じであり、これらの建物はあまり隔たらない時期に同時存在していたことが考えられ、当地域周辺には奈良時代前期になんらかのまとまりのある施設があることが想定されよう。また、鉄製U字形鋸先の出土は斎宮では初めてであり、その出土状態の良好なことから今後の調査で鉄製遺物の出土も十分に期待できそうである。

3. 第70-2次調査（6 A E E-W）

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字東殿2875-2

原因 個人住宅の新築

調査主体 明和町

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和62年6月22日~6月24日

調査面積 12m²

1) はじめに

申請地は史跡中央東北部にあたる位置にあり、当調査区周辺は、かつて漁屋や農業実習所があったところでもあり、各所に擾乱が予想された。

2) 調査概要

遺構検出面までの深さは、0.37~0.51mである。特にまとまりのある遺構は見出せず、おしなべて平安時代後期の土師器杯類が出土している。SK5180の撮影は重複によって大きくなつたもので、上層からは平安時代後期の土師器

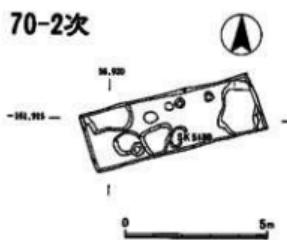


fig. 6 遺構実測図(1:200)

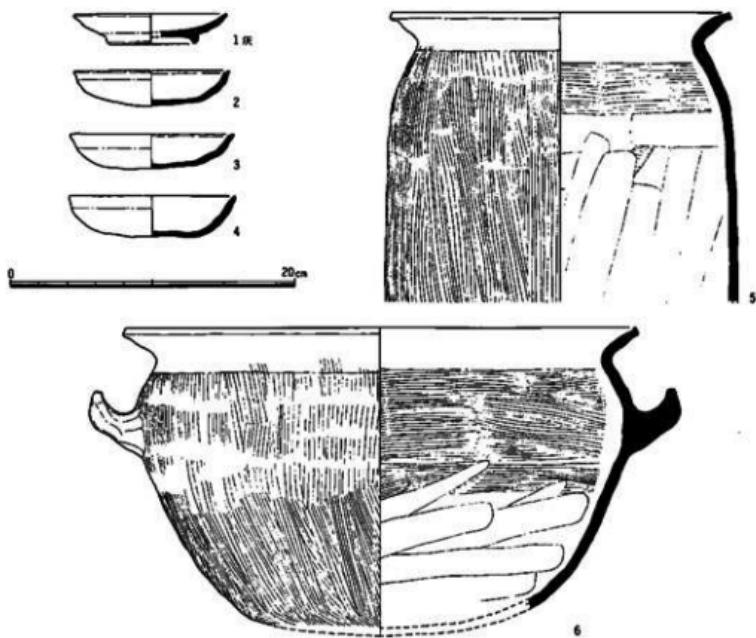


fig. 7 造物実測図(1:4) SK5180 ; 1 ~ 6

片が出土し、下層からは奈良時代後期の土師器鍋・甕が重なるように出土した。従って、この周辺には少なくとも、奈良時代後期と平安時代後期の建物があると予想しなくてはならない。

4. 第70-3次調査 (6ADR-I)

調査場所	多気郡明和町大字斎宮字木葉山129-5、130-7
原 因	農業用倉庫の新設
調査主体	明和町
調査担当	三重県斎宮跡調査事務所
調査期間	昭和62年6月22日～7月2日
調査面積	260m ²

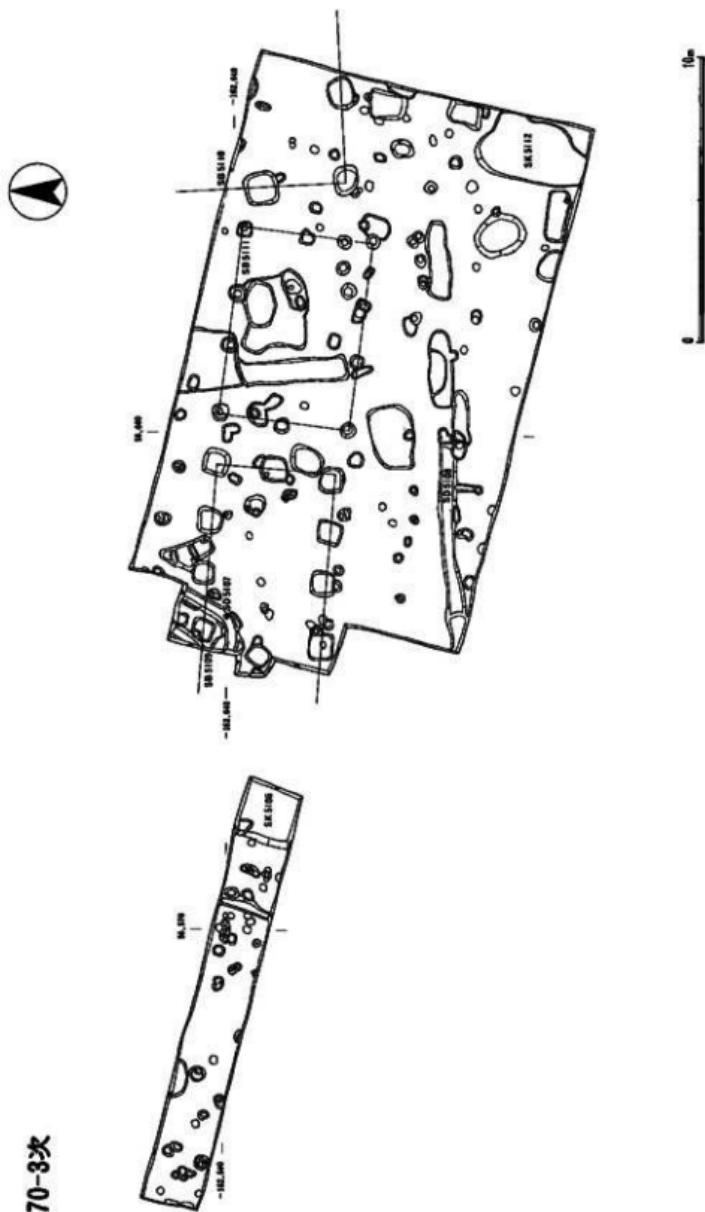


fig. 8 造構実測図 (1 : 200)

1)はじめに

調査地は、斎宮駅の南西約300mで、旧参宮街道の南側で、史跡指定地の南辺にあたる地域である。これまでに近辺では、第9-2次、第9-3次のトレンチ調査と第37-8次調査、第53-11次調査、第58-6次調査が実施されており、第53-11次調査では、奈良時代の掘立柱建物、竪穴住居などが、第58-6次調査では平安時代の溝が確認されている。

今回の調査は、第9-2次調査の行われたトレンチをはさみ、西調査区30m²、東調査区230m²を設定して行った。

2)調査概要

調査面は、西調査区、東調査区とともに約0.2m前後と非常に浅い。検出した遺構は、東調査区においては、奈良時代末期から平安時代初期の溝S D5108と、それと方向性を共にすることからほぼ同じ頃と考えられる掘立柱建物S B5110がある。柱掘形は、一辺1.0~1.2m、深さ0.8mを測る。S D5108においては埋土から土師器甕が、S B5110においては、柱穴埋土より土師器甕が出土している。ほかに同時期の遺構と考えられる土塙S K5112がある。

平安時代前期の遺構としては、掘立柱建物S B5109・5111がある。掘立柱建物S B5109は、2間×3間以上の東西棟で、柱掘形は一辺0.8~0.9m、深さ0.4m前後を測る。S B5111は2間×3間の東西棟で、柱掘形は一辺0.6m、深さ0.3mを測る。S B5109・5111ともに柱穴より土師器甕が出土している。鎌倉時代前期の遺構としては、発掘区北西隅の溝S D5107が検出されており、埋土からは山茶椀が出土している。

西調査区においては、トレンチの幅が狭いため、柱穴は掘立柱建物としてはまとまらないが、トレンチ東隅において、鎌倉時代の土塙S K5106が検出されている。

遺物は整理箱で7箱あり、特殊な遺物には西調査区から、綠釉陶器2片、二面円頭風字甕が出土している。後者は（fig. 9のとおり）左先端の小片である。破片内面右端の剥離痕は堤の跡と考えられるので二面円頭風字甕とした。研磨部に朱の痕跡がわずかに残る。

今回の調査では、S B5110・5109の2つの大型掘立柱建物が検出された。S B5110は柱間は10尺（1尺：0.296m）、S B5109は柱間は7尺である。

柱間10尺の規模を持つ掘立柱建物は斎宮の中では最大級のものであり、類例は少ない。第37-8次調査、第43-4次調査でこの地区に大型掘立柱建物の存在が示唆されていたが、今回の調査で、奈良時代末期から平安時代前期の大型掘立柱建物が確認されたことより、史跡全体の中における当地域の位置づけに新資料を提供するとともに、今後の調査によりさらに解明されることが期待される。

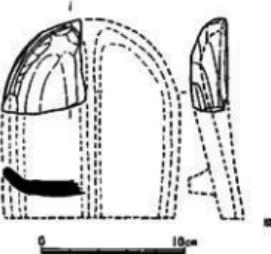


fig. 9 遺物実測図(1:4)

5. 第70-4次調査(6ACN-A・B・E・L)

調査場所 多氣郡明和町大字斎宮字広頬3389-8、3382-1、3382-4
原因 盛土
調査主体 明和町
調査担当 三重県斎宮跡調査事務所
調査期間 昭和62年8月3日～8月8日
調査面積 164m²

1) はじめに

当該申請地は、斎宮小学校の東側に位置する。今回の調査は、遺構面までの深さ、地下遺構の密度等の把握に主眼をおき、今後の当地域調査のための資料とすることにした。幅1mのトレンチを約164m(A・B・C・Dトレンチ)入れて実施した。

周辺の調査には西側で斎宮小学校の一連の調査(第15次、第48-1次、第48-13次、第53-1次、第53-14次、第64-11次)や、第25-9次、第31-8次調査が実施され、奈良時代～室町時代の遺構が検出されている。なかでも第15次調査では平安時代後期の四脚門が、斎宮では初めて検出されている。

2) 調査概要

遺構面までの深さは、調査区全体がほぼ同じで、上から耕土・床土が0.2m、包含層が0.2mの計0.4mと非常に浅い。検出した遺構には、主に平安時代後期の東西溝・南北溝6、土塙3、井戸1がある。このうちAトレンチで検出した東西溝S D5118・5119は、西側の第15次調査で検出された四脚門に取り付く塙の南北両側溝と考えられる。この東西溝は東側のCトレンチでは検出されず、また、南のBトレンチでも検出されていないため、途中で北側に曲がるものと思われる。

出土した遺物はすべてのトレンチを合わせて整理箱で1箱と少ないが、Cトレンチ南端で検出した井戸S E5125は完掘はしていないが、平安時代後期の遺物が少量出土している。

今回の調査の結果、平安時代後期を中心とする溝、土塙、井戸が検出されている。掘立柱建物についてはトレンチの幅が狭いためにまとまるものは確認できなかったが、掘立柱建物になると考えられる柱穴をいくつか確認している。このように掘立柱建物については不明な点が多いが、西側の四脚門に取り付く塙の南北両側溝等が確認された。従ってここは平安時代後期の斎宮を考える上で重要な地域であると思われ、今後新たな現状変更がてきた場合には、面的調査の必要な地域であろう。

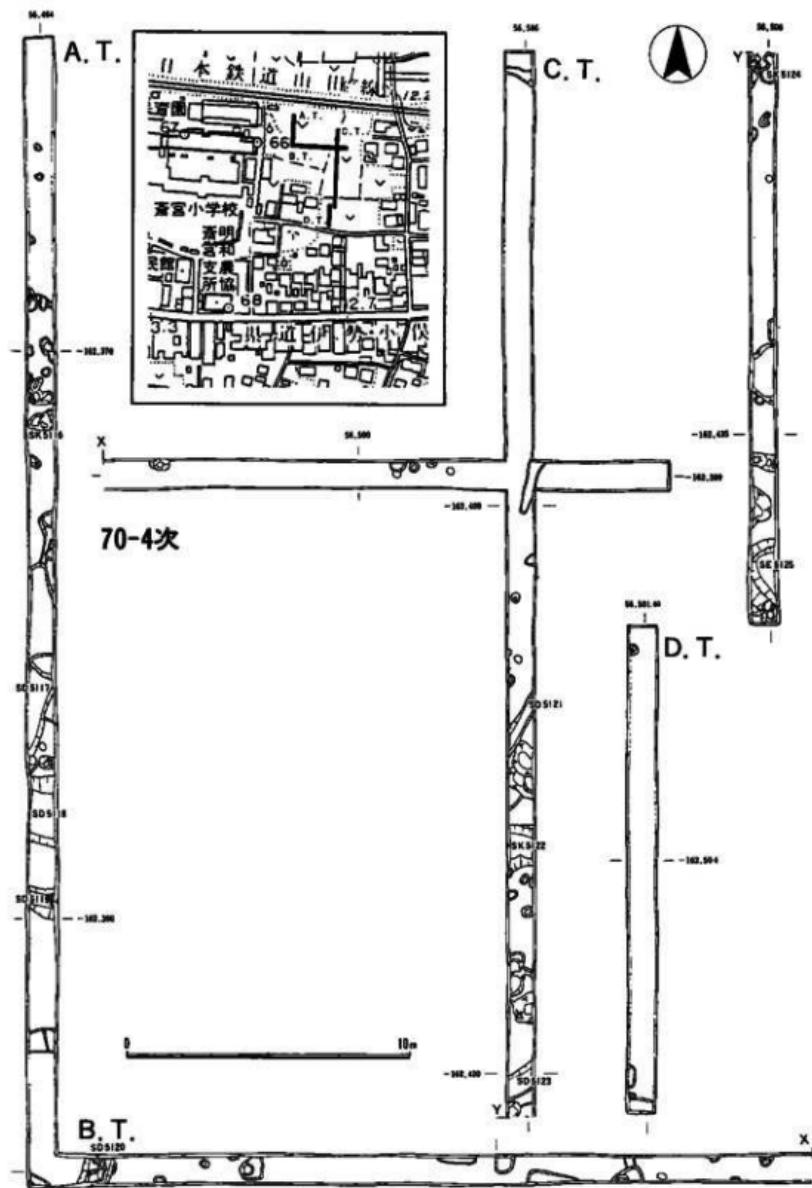


fig. 10 造構実測図 (1 : 200)

6. 第70-5次調査 (6 AEW-A)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字鉢池333-1
原因 農業用倉庫の新設
調査主体 明和町
調査担当 三重県斎宮跡調査事務所
調査期間 昭和62年11月9日～11月17日
調査面積 121m²

1) はじめに

当該申請地は、竹神社の南西約100mの箇所で、旧参宮街道の南側、史跡指定地の南辺にあたる地域である。これまで近辺では、第9-1次・第9-9次のトレンチ調査と第25-10次調査、第26-3次調査が実施されている。第25-10次調査では、平安時代後半の二段に掘られた素掘り井戸が検出されており、第26-3次調査では、平安時代後半の素掘り井戸・土塙、平安時代末期の土塙が検出されている。

2) 調査概要

遺構面までの深さは、調査区全体がほぼ同じで、上から耕土・床土が0.2m、包含層が0.2mの計0.4mである。検出した遺構には、奈良時代中期の掘立柱建物SB5130、平安時代の溝SD5128・5129、平安時代後期の土塙SK5127がある。SB5130は2間×3間の南北棟の建物である。SD5128とSD5129は約8m間隔で並行する溝である。SK5127は、2.5m前後の不整規円形の土塙で深さは約0.6mである。この土塙からは多くの遺物が出土したが、主なものには、縄文陶器の椀、灰陶陶器の椀・皿、黑色土器の碗、土師器の高杯・碗、釘などがある。

遺物として特筆されるのは、縄文陶器がSK5127を中心として全体で15片程出土している。今回の調査では、建物はSB5130の掘立柱建物のみであるが、発掘区端で建物としてはまともないが、掘立柱建物になると考えられる柱穴も確認されている。また、史跡南端にあたる

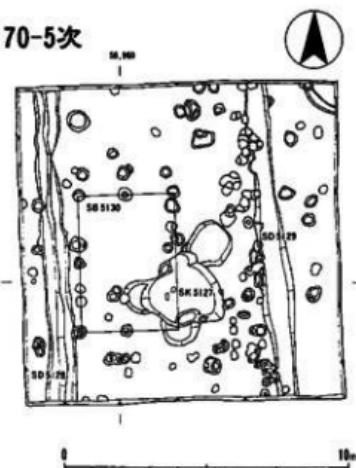


fig. 11 遺構実測図 (1:200)

周辺地域で、奈良時代の掘立柱建物が確認されたことは、当地域の位置づけに新たな資料を提供することができた。

7. 第70-6次調査 (6ABL-S)

調査場所 多気郡明和町大字竹川字中垣内430-6、436-4

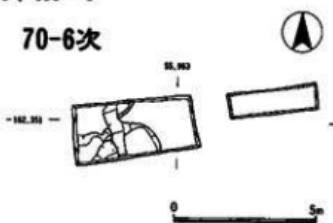
原因 盛土 70-6次

調査主体 明和町

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和62年11月26日～11月30日

調査面積 12m²



1) はじめに

当該申請地は、竹川墓地の西100m程に位置し、山林の中のすりばち状の窪地である。調査は、この斜面に2m×4.5m、1m×3mの2本のトレンチを設定し、計12m²について窪地の形成の解明に主眼をおいて実施した。

2) 調査概要

土取りをおこなったと思われる土塙を検出したが、遺構は検出されなかった。窪地の形成は土取りによるもので、その後、ゴミ捨て場的に利用され現状に至ったものと考えられる。搅乱された埋土からは、近代の陶磁器とともに飛鳥時代の須恵器、土師器が出土している。

これまで周辺地域の調査では、第58-4次・第58-8次調査で飛鳥時代の遺構が確認されている。今回の調査では遺構は確認できなかったが飛鳥時代の遺物が出土している。窪地そのものは、池等の遺構ではなかったが、形成以前を含め周辺地域は飛鳥時代の遺構のひろがりが充分考えられる地域である。



fig. 13 遺物実測図 (1:4) 包含層：1～8

8. 第70-7次調査(6 AEE-T)

調査場所	多気郡明和町大字斎宮字楽殿577
原因	盛土
調査主体	明和町
調査担当	三重県斎宮跡調査事務所
調査期間	昭和62年12月7日～63年1月13日
調査面積	264m ²

1)はじめに

調査地は「斎王の森」の東北 160mの位置で、現状は畠地である。6月に森の東で前述の第70-2次調査を実施した。その調査は12m²と小規模なものであったが、検出された遺構、遺物から奈良時代後期および平安時代後期の遺構が、周辺に広がることが確認された。

なお調査は、耕作土下の土が堅くしまっていたため、重機を使用した。

2)調査概要

遺構面までの深さは、地表から 0.6m である。検出された遺構は溝3条と柱穴等があるが、柱穴は掘立柱建物としてまとまるものはなかった。以下溝3条について述べる。

南北溝 S D5133は調査区西北にあり、調査区内から始まり北に延びる南北溝である。幅 0.6m、深さは南端で 0.5m、北に向かって深くなり調査区北端では 0.6m である。溝の振れは、ほぼ南北方向である。平安時代末期の遺物を少量出土した。

西から伸び南に折れ曲がる溝 S D5134は S D5133より古く、S D5135より新しい。幅 0.6m、深さ0.2~0.3m。溝の振れは東で北に 8° 振れている。出土した遺物は奈良時代のものと思われる土師器の甕片 2 点・杯片 1 点が出土した。遺物が少なく時期を明瞭にし難いが、奈良時代の遺構とした。

南北溝 S D5135は S D5134より古いもので幅0.7~1.2m、深さ0.1~0.2m。出土した遺物は奈良時代前期の須恵器長頸壺、土師器皿・甕が少量出土した。

今回の調査で出土した遺物は整理箱で 4 箱ある。奈良時代と平安時代後期以降のものが中心で特殊なものとしては縁輪陶器が 1 点出土した。

検出した遺構は少ないが、東側の第70-2次調査同様に奈良時代と平安時代の遺構が検出され、周辺に同様の遺構が広がっていることがより明らかとなった。また、奈良時代のL字状に折れ曲がる溝は、なんらかの施設を取り囲む可能性もあるが、時期および性格については今後の周辺の調査に期待したい。

70-7次

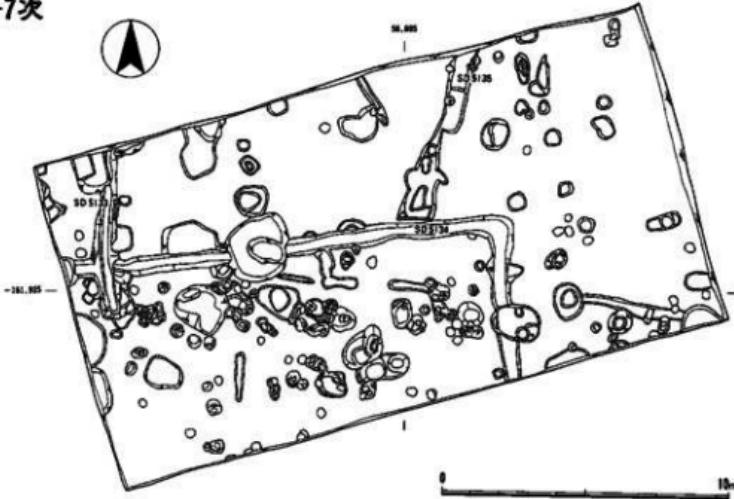


fig. 14 造構実測図 (1:200)

9. 第70-8次調査 (6AEU、6AEX-A)

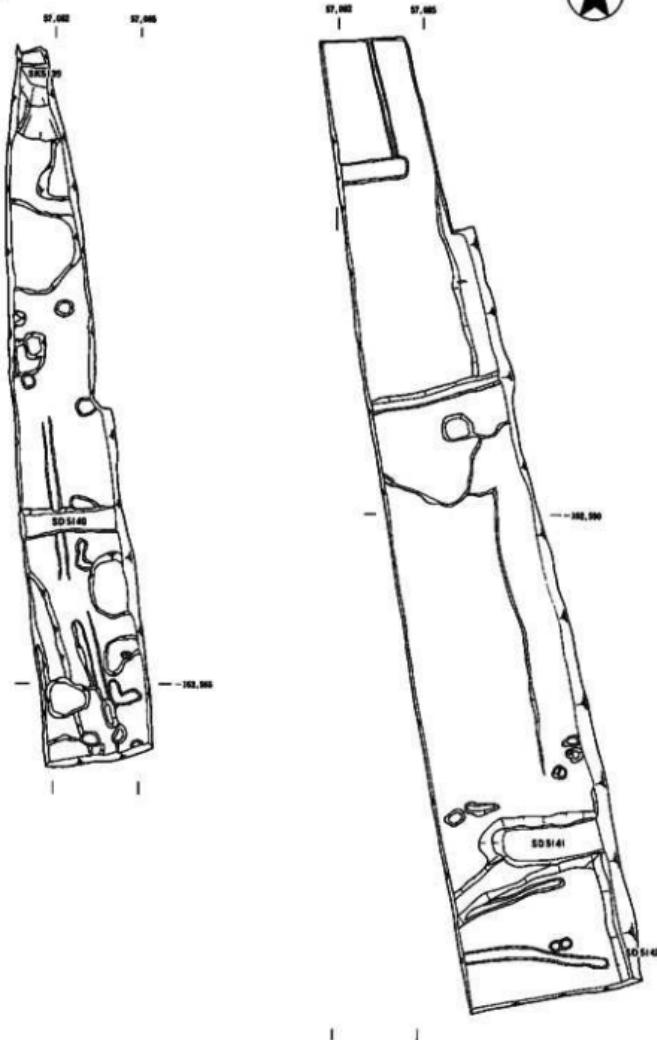
調査場所	多氣郡明和町大字斎宮字牛葉・鈴池地内
原 因	県道田丸停車場・斎明線改良
調査主体	三重県斎宮跡調査事務所
調査担当	三重県斎宮跡調査事務所
調査期間	昭和63年1月18日～2月3日
調査面積	230m ²

1) はじめに

本調査は、現在の竹神社から南に延びる県道田丸・斎明線の道路拡幅に伴う調査である。史跡南端部では、今回の調査地の南を走る東西道路・排水路部分が昭和54年度に県営圃場整備事業に伴い調査（第26-3次調査）が実施されており、その調査では、平安時代後半から近世初頭に至る遺構が検出されている。

なお、今回の調査地は南の水田部分と北の住宅地部分に分けられ、住宅地部分については重機を使用して調査に入った。

70-8次



0 10m

fig. 15 造構実測図 (1 : 200)

2) 調査概要

遺構面までの深さは、水田部北では地表から 0.3m、途中から一段深くなり南半では 0.5m である。また、北の住宅地部は、水田部北の遺構面とはほぼ同じレベルである。検出された主な遺構には水田部南で東西溝 S D5141、南北溝 S D5142、住宅地部分で東西溝 S D5140、土塙 S K5139がある。

東西溝 S D5141は調査区中央から東に延びる幅 2 m、深さ 0.8m の規模の大きなものである。埋土は粘質土で、平安時代末期の遺物が少量出土している。南北溝 S D5142は東西溝 S D5141と重複する溝で、西肩の一部を検出したため規模は不明である。深さ 0.5m、埋土の断面精査から東西溝 S D5141と同時存在した溝と考えられる。

東西溝 S D5140は、幅 0.5m、深さ 0.3m。遺物は土師器の小片を 2 点出土したのみである。おそらく平安時代前期の遺構と考えられる。土塙 S K5139は住宅地部北端で検出した。規模は南北 3 m 以上、東西 1.5 m 以上、深さ 0.5m である。埋土から平安時代後 II 期の遺物の小片が整理箱で 1 箱出土している。

県道田丸・斎明線の位置する道路は參宮名所図絵（寛政九年）に竹神社（當時野宮と称す）と共に描かれており、どこまで遡るか不明であるが、古代の斎宮から伊勢へ抜ける主要道路であることが推察されている。今回の調査では道としての遺構は検出されなかったが、史跡南端部に約 70 m ほどの南北トレンチを入れる結果となった。南端部の区画溝については不明な点が多く、検出した溝 S D5140～5142の性格については今後の課題としたい。

10. 第70-9次調査（6 A E P-C・D）

調査場所	多気郡明和町大字斎宮字御館・柳原地内
原 因	保全櫻新設
調査主体	明和町
調査担当	三重県斎宮跡調査事務所
調査期間	昭和63年 2月 8日～2月 9日
調査面積	17m ²

1) はじめに

近鉄宇治山田線路沿い（斎宮駅東方 150 m）北側に柵垣建植（延長 146 m）の工事があり、現場立合をした。工事中に遺構面が検出されたので工事を中止させて、遺構面の検出された 41.4 m について幅 0.4 m のトレンチ調査を実施した。

70-9次

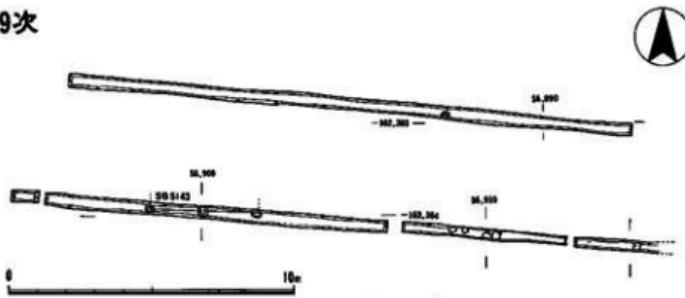


fig. 16 造構実測図 (1:200)

2) 調査概要

現地表から約0.5mで造構面に達するが、地層としては、第1層：灰褐色表土と第2層：暗褐色土に分かれる。

SB5143とした2間分3柱穴は、掘形の径0.3mと小規模のもので、ここから南北いずれに延びる掘立柱建物と推定される。柱穴内から出土した土師器細片からは明確な時期決定はむずかしいが、平安時代後期の範疇を出るものではない。

11. 第70-10次調査 (6 A F D-B・D)

調査場所	多氣郡明和町大字斎宮字西前沖2649-4他
原 因	盛土
調査主体	明和町
調査担当	三重県斎宮跡調査事務所
調査期間	昭和63年2月10日～3月2日
調査面積	188m ²

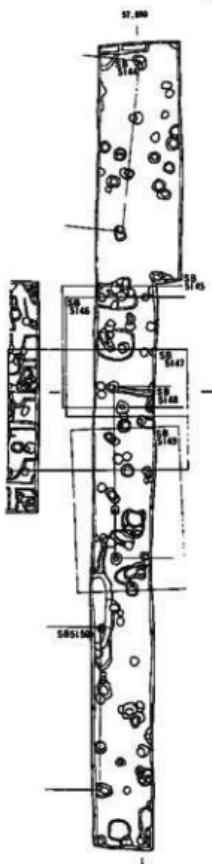
1) はじめに

当該申請地は宮域東部でも西北寄りの西前沖地区に位置し、西側のB区は南北に細長く、幅2m(北側では3m)、長さ28m、東側のD区では東西20m、南北6mの調査区を設定し調査を行った。

2) 調査概要

B区は地表より約0.25～0.3mで造構検出面となる。第1層：耕作土と第2層：茶褐色土からなる。検出した主な造構としては掘立柱建物(SB5144～5150)と考えられるものが7棟ある。

70-10次



調査区の幅が狭く、又出土遺物も細片が多いため規模及び時期の判断はむずかしいが、SB5144は3間×(2)間の南北棟と考えられ、平安時代中期の新しい段階に属する。SB5145～5147・5150は(3)間×2間の東西棟か。なおSB5150は南側に1間分の廂を想定している。SB5149は3間×(2)間の南北棟であろう。これら5棟は平安時代末期のものと考えている。SB5148は3間×(2)間の南北棟で、平安時代後期～末期の建物と推定する。

D区は地表より0.4～0.6mで造構検出面に達する。第1層：耕作土、第2層：暗褐色土、第3層：暗茶褐色土である。調査区を東西に横切るSD5155は幅2.2m、深さ0.5mで鎌倉時代前半の溝である。重複するSD5154は新しく室町時代のもので、幅0.6m、深さ0.3mを測る。SB5151は(3)間×2間の南北棟と思われ平安時代後期、SB5152・5153は前者が東西棟、後者が南北棟と考えられ、いずれも平安時代前II期としておきたい。

遺物は整理箱で16箱あり、特殊なものには綠釉陶器が59点、瓦片1点がある。

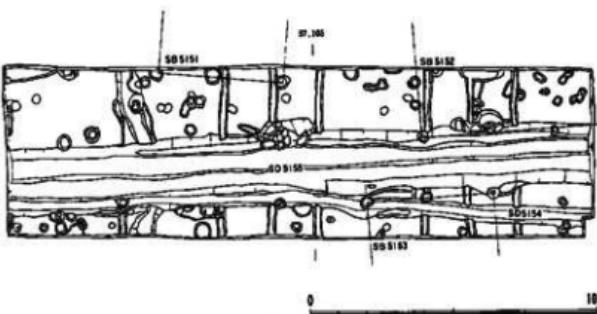


fig. 17 造構実測図 (1:200)

12. 第70-11次調査 (6 A G O - H)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字鍛冶山2363-2
原 因 盛土
調査主体 明和町
調査担当 三重県斎宮跡調査事務所
調査期間 昭和63年2月22日～2月29日
調査面積 36m²

1) はじめに

調査地は、史跡指定範囲の東南にあたり、現状は畠地である。調査は 2.5m × 14.5m のトレーナーを東西に設定して約36m²実施した。検出した遺構・遺物から奈良時代後期及び平安時代前期の遺構が周辺に広がっていることが確認された。

2) 調査概要

遺構面までの深さは現地表から 0.4m である。検出された遺構は、掘立柱建物 4、土塁 1 である。掘立柱建物はいずれも一部が検出されているだけである。SB5160は、0.7~0.8m の柱掘形をもつ建物であるが、東西に 2 間分が確認されている。サブトレーナーを設定した結果、この建物は南ではなく、北へ続く建物と考えられる。柱穴埋土は暗褐色土と黄褐色土の混入土である。SB5163は、東西 2 間 × 南北 1 間以上の建物で南北棟と考えられる。SB5161・5162は共に東西 2 間分が確認されている。共に西と南へは続かない建物である。建物の時期は、SB5160の柱穴より少量の土師器が出土しており、混入の可能性も考慮しなければならないが、奈良時代後期を一応想定しておく。埋土の切り合い関係より SB5163・5161は SB5160より古く、SB5162は SB5160より新しい。土塁 SK5159は、一部が検出されているだけであるが、埋土より土師器、須恵器、製塙土器、土錐が出土しており、平安時代前期と考える。

今回の調査で検出した遺構は
遺物と同様に奈良時代後期と平安時代前期のものが中心である。
周辺では第48-11次調査でも奈良時代の遺構が確認されており、

この地域にも奈良時代の遺構が
広がっていることが明かとなっ
た。

70-11次

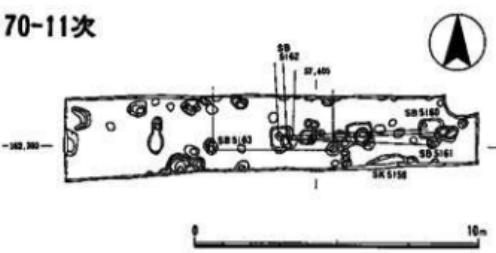


fig. 18 遺構実測図 (1:200)

13. 第70-12次調査 (6 ADD-F・G)

調査場所 多気郡明和町大字奈宮字篠林3158、3159

原因 個人住宅の新築・盛土

調査主体 明和町

調査担当 三重県奈宮跡調査事務所

調査期間 昭和63年2月27日～3月2日

調査面積 51m²

1) はじめに

申請地は史跡中央部

の篠林地区の中央西部

に位置し、これまで当

地域周辺での幾つかの

調査により、周辺には

奈良時代を中心とする

遺構が広がっているこ

とが判明している。

2) 調査概要

今回の調査は、擁壁

部分に合わせて幅約1

m、コの字形に調査区

を設定した。検出した

遺構には柱穴、土塙な

どを多数検出したが、

調査区の制約もあり掘

立柱建物についての詳

細は不明である。

出土した遺物は整理

箱で2箱あり、特殊な

遺物としては綠釉陶器

1点がある。

70-12次

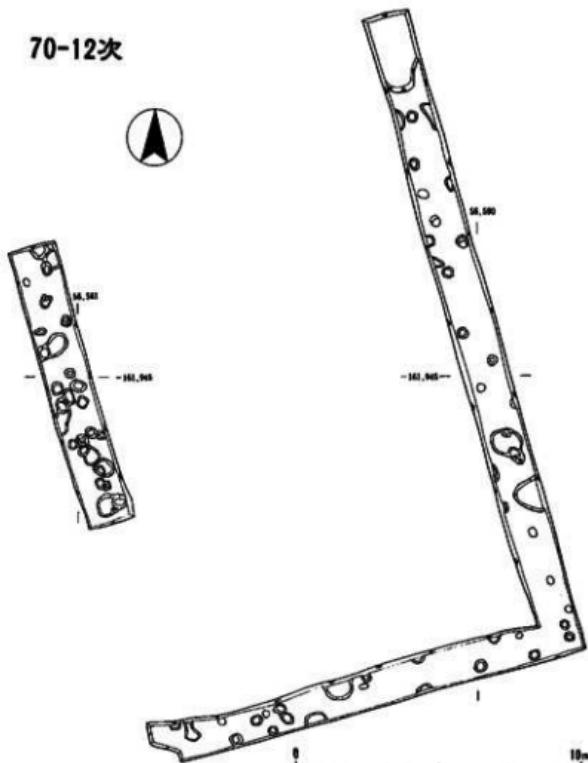


fig. 19 遺構実測図 (1:200)

14. 第70-13次調査（6 A E C - N · G）

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字苅干2862-1

原 因 個人住宅の新築

調査主体 明和町

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和63年3月9日～3月25日

調査面積 212m²

1) はじめに

当申請地は宮城北辺部の苅干地区に位置し、4m × 53m の南北トレンチを設定し調査に入った。西に接する場所では昭和56年度に第37-7次調査が実施され、東西溝4条が（2条の溝は鎌倉時代前半のものである）調査区南で検出されている。

2) 調査概要

遺構面までの深さは耕土、床土の計0.3mで、調査区北端で東西溝1条を検出しただけで、他は近現代の搅乱である。

東西溝S D5170は、幅2.0m、深さ0.5mの比較的大きな溝であるが、出土した遺物がなく時期は不明である。

70-13次

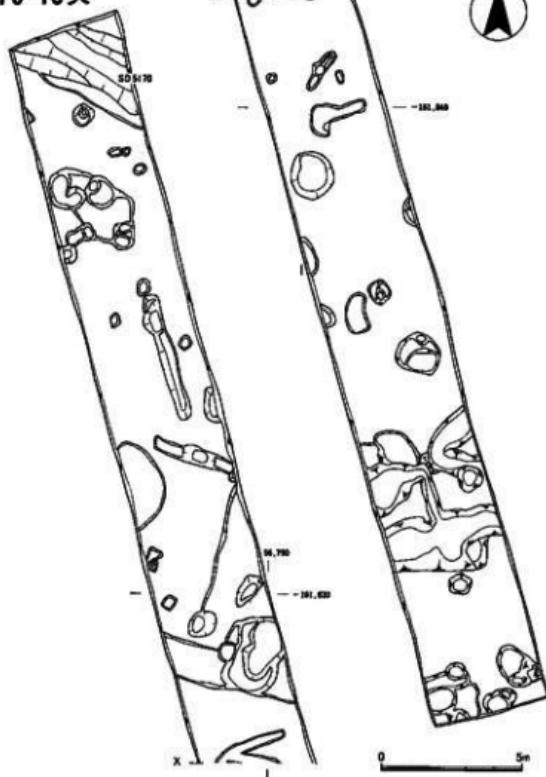


fig. 20 遺構実測図 (1:200)

15. 第70-14次調査（6ABL-R）

調査場所 多気郡明和町大字竹川字中垣内459
原因 農業用倉庫の新設
調査主体 明和町
調査担当 三重県史跡調査事務所
調査期間 昭和63年3月10日～3月23日
調査面積 48m²

1) はじめに

当該申請地は、竹川墓地の西100m程に位置し、現状は畠地である。調査は、6m×8mの48m²を実施した。

2) 調査概要

当該申請地には、以前小学校があり、そのためかかなり搅乱をうけていた。遺構としては、土塙2(SK5173、SK5171)、溝1(SD5172)があげられる。SK5173からは弥生式土器が出土しており、弥生時代後期と考えられる。SK5171とSD5172からの遺物は少なく、かつ細片で時期決定はできないが、埋土の切り合い関係により、SD5172の方が新しいことが確認されている。

これまで周辺地域の調査では、第58-4次・第58-8次調査で飛鳥時代の遺構が検出され、今年度行った第70-6次調査でも飛鳥時代の遺物が出土している。今回の調査でも、飛鳥時代の遺構が確認されることが予想されたが、かなりの搅乱を受けていることもあり検出されなかった。また一部ではあるが、弥生時代後期の土塙が確認されたが、これは、史跡西部の台地縁辺部に弥生時代の遺構が広がることをあらためて示すものである。



fig. 21 遺構実測図(1:200)

16. 第70-15次調査 (6 A F D-A)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字西前沖2644-1
原 因 個人住宅の新築
調査主体 明和町
調査担当 三重県斎宮跡調査事務所
調査期間 昭和63年3月23日～3月30日
調査面積 76m²

1) はじめに

当申請地は、宮城東部でも西北寄りの西前沖地区に位置し、現状は畑地である。東に接する畑では今年の2月に第70-10次調査が実施されている。

2) 調査概要

調査区は、東西9.5m、南北8m。-遺構面までの深さは浅く、耕土0.2mの下は包含層が0.05～0.1mあるだけで、すぐに遺構検出面である。検出した主な遺構には掘立柱建物2、土塙1、南北溝4がある。掘立柱建物S B 5174は東西2間分を検出したが時期は不明である。S B 5147は東の第70-10次で

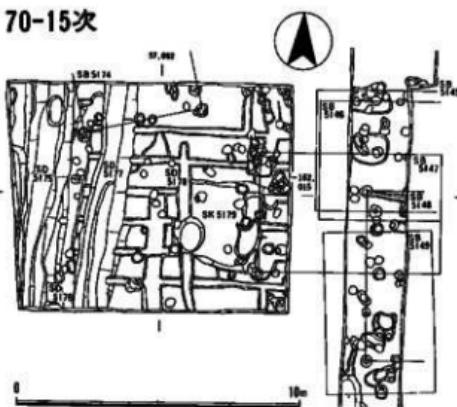


fig. 22 遺構実測図 (1:200)

も確認されており、3間×2間の東西棟と考えられる。時期は平安時代末期と考えられる。

南北溝4条は、埋土の違いから茶褐色土と黒褐色土の二者に分かれ、前者(S D 5175・5177)が出土する遺物から平安時代後期～鎌倉時代に、後者(S D 5176・5178)は出土する遺物がほとんどないが前者より古く(S D 5176)奈良時代の土塙S K 5179より新しい(S D 5178)。おそらく平安時代前期のものと思われる。土塙S K 5179は一辺約3mの方形を呈し、深さは0.2mである。奈良時代の遺物を少量出土した。東側で焼土が少し検出されたため竪穴住居の可能性もあるが、形がやや不整形であること、小さすぎることからここでは土塙としておく。

出土した遺物は整理箱で3箱あり、特殊なものには綠釉陶器が2点と南北溝S D 5175から軒丸瓦が1点出土している。

図 版



第70-1次調査（北から）



第70-2次調査（西から）

P L 2



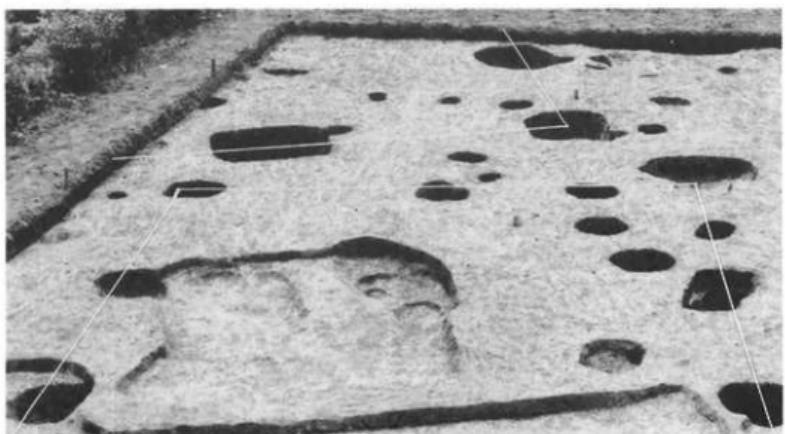
第70-3次調査（東から）



第70-3次調査 S B5109・S B5111（東から）



第70-3次調査（西から）



第70-3次調査 SB5110・SB5111（西から）

P L 4



第70-4次調査 Aトレンチ・Bトレンチ（南西から）



第70-5次調査（北から）



第70-6次調査（東から）



第70-7次調査（東から）

P L 6



第70-8次調査（南から）



第70-10次調査（西から）



第70-10次調査（南から）



第70-11次調査（西から）

P L 8



第70-12次調査（東から）



第70-13次調査 S D 5170（北から）



第70-14次調査（東から）



第70-15次調査（南から）

史跡斎宮跡
昭和62年度現状変更緊急発掘調査報告

昭和 63 年 3 月 31 日

編集 三重県斎宮跡調査事務所
明 和 町
発行 明 和 町
印刷 光出版印刷株式会社
